

特54

特54-127



\*1200800239305\*

27

# 平等

第壹号

明治二十六年二月

録

目

- ◎ 平等
- ◎ 寄書
- ◎ 雜錄
- ◎ 記事
- ◎ 小學

新  
年  
民  
主  
義

元  
氣  
と  
平  
和  
藤  
村  
作

立  
花  
宗  
茂  
公  
山  
吹  
篇

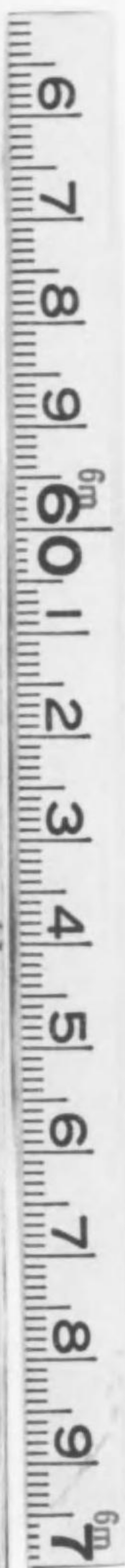
千  
島  
艦  
沈  
没  
の  
將  
士  
を  
吊  
す

數  
件

(一月一回)

平  
等  
會

(非賣品)



# 始





◎異個文明的の事業は。恰も深山の溪谷より滴たれる水が。岩に觸れ石に碎けて。千變万化し。幾多の障害物を潜りて。漸次低きに下り。遂に諸水を合せ。始めて萬里の平原を貫き。汪洋として大海に朝するが如く。純然たる秩序を踐み。万難を排して。公明正大。至貴至尙なる。天道を求め得るにあり。故に泰山を抱て北海に飛ぶが如き。若しくは一朝にして。驚天動地の伎を演ずるが如きは。吾人の敢てせざる所なり。蓋し。平民的に働き。平民的に務め。人らしき精神を有し。人らしき進歩を取り。實量に高潔に。勉強に遠大に。實際の眞面目なると。前途の多望なるとを以て自ら任じ。然して其間。因循なる姑息なる未開風の。人為増塹を打破し。社會をして神聖なる自由と。敬愛の實を擧げ。萬般の事。悉く平等なる圓石を轉じて以て。固然たる平和の乾坤を成さしめんこと。吾人の大精神。亦本紙の大眼目にして。其文章の拙劣と。立論の迂濶なるとは。寸毫も關する所に非ず

平等第壹号

平 等

新 年

明治二十六年二月發兌

明治二十六年は笑ひを含み快々として。出精なる。好良なる。進取なる。敬虔直卒なる。新日本の青年の爲めには。最も價を強ふして來れり。コハ。玲瓏たる寶玉よりも。四面八方に輝やくダイヤモンドよりも。大なる價値あるべし。然れども懶惰放逸の黨に向ては。瓦石よりも猶ほ賤しく。一厘半毛の價ひあるべからず。今天がイト。惠み深く與へたる此の歳は。吾人が精神如何によりて。或は雲となりて高く。或は泥となりて卑くあるべし。回想す。明治二十三年正月一日。天將に明けんとするや。病ひて横へたる。日本近世の大人傑新島先生は



送、康体、悲病、麻身、 鷓鴣、早已、報、佳、辰、

劣才、縱、乏、濟、民、策、 臂、抱、壯、圖、迎、此、春、

大河の海洋に朝する。洋々として大船巨舶を浮べるに至る。彼れ猶山間  
溪谷の消瀾よりす。吾輩今爰に學ぶこと僅かに。爲すこと小に。然れども  
將來を達觀するときは。此れ予一世の大品格を形ち作るの。堅鎖の地盤  
たることを知る。爰に於てか。洪瀾の胞中に捲き來るを覺ゆ。乞ふ共に々  
々壯圖を抱て此春を迎へん

平 民 主 義

悲嘆すべき哉。今や天下の人。悉く平民主義の下に立んとす。(政治社會の  
事を言ふにあらす)此の大風潮は。八丈島を渦まきて流れる黒沙の如く。  
大波瀾をなして汪洋として。日本全島を西南より東北に向て吹き貫ぬ  
き。千山萬野の草木靡然として之れに従ふ。吾人は夙に平民的を主義と

(二)

し。平民的を珍重す。然れば此の快活の風は。揚々自得すべきに。次て悲み。  
以て嘆するは。少しく物の理法に合はざるが如しと雖も。若し精細なる  
眼を放ちて。其の眞象を洞察するときは。長大息をなさざるを得ず。何と  
なれば彼等は。平民的とは果して如何なるものとせしかよ。此れを思ひ  
此れを考ふれば。轉た痛嘆に堪へざるなり。吾人嘗て兒童のとき。襟裾の  
矢部物語なる奇談を聞けり。時の感想には。彼の地にして斯の如き偏陬  
なるときは。人の聲も鳥の如く。人の膚も獸ものの如く。言語舉動。宛然猿  
の如きものならんと思ひ定めたり。爰に於て一たび峻坂に攀ぢて。其山  
川を跋渉せんことを希ふ甚だ切なりき。爾來中學にありて矢部の學友  
あり。始めて風景秀拔。仙境の如くあるを知り得たりぬ。後彼れに遊ひ。彼  
を跋渉して。其山水明美風色絶佳なるを嘆稱し。文を作り詩を吟じ。畫を  
描いて其奇景を賞す。昨秋復た或る數多の兒童の熱心願望によりて。之



平等

れを誘ひ遊女。時に案に相違して捧腹絶倒。寧ろ心痛極まりしなり。何となれば彼等は。始め大に望み。過だ願ひ。非常の觀。奇妙の怪。ありしと思ひしなるべし。而して彼の地の言語も同じく相通じ。衣服も亦た同じく衣服なり。却て或者は眞率にして直言直行。恐るべきの姿あり。故に彼等は忙然として失色あり。怨嗟の聲を發するに至る。彼等が踏みし路程の遠き。山途の峻險なりしとは彼等をして大に苦しめ。甚だ勞れしめたり至れば。人は猿にあらす。奇異の以て彼等の心を慰むるに足らざりしければなり。怨嗟の聲！不平の聲！彼等の襟襖の歡話と。彼等の妄想とは吾人が今にして出さるべからざる。爵金とはなれりぬ。矢部にして。若し日向見大明神の靈あらば。大に笑ひ。大に怒るならん。何となれば數百年來。數多の文人學者の稱賛を得。神地仙境を以て尙まれたる所にして。今日此等の人の舌頭にて。敗者となり。卑賤の地境となり。其大惡名

を蒙りたればなり。

如斯今や平民的の大妄想者。平民的の大雷同者は。顯はれたり。彼等は平民主義なるものを餘り大に望み。過た強く願ふて。不釣合にも。寧ろ口に平民的と唱ふるも。潔とし。快とする程にして。群がり來れり。知らず彼等は怨嗟の聲を發することなきかよ。不平を鳴らすことなきかよ。平民的生活とは。安逸安臥を以て世を渡るの謂にあらざるなり。遊惰放逸の異名にあらざるなり。似きもせず。勉めもせず。智識も富も青雲も得らる。と云ふにあらざるなり。見識もなく力もなく人を支配すると云ふにあらざるなり。世人平民的を唱ふる者。果して此の覺悟あるか。平民的とは。自ら働き。自ら助け。最も節儉に。最も慈悲に。天下の萬民と共に悦び共に悲み。言は々志は天の如く高尙にして。其の身は泥中にありて。一升と五合の汗を絞るべきなり。

平等

(三)



唯つ何者ぞ。偽平民的主義者よ。汝が徒らに身邊の裝飾を美にし。勞せずして取り。一朝飄然として大利益と。大名譽とを翻まんぞ欲するは。汝が醜体なる地金を露出したるものなり。春草の如く虚榮を希ふ者は汝なり。惡水の蟲の如く前後の分別なきは汝なり。去るべし。去るべし。偽平民的主義者は遠く去れ。薄心弱行。富貴に媚び。風潮に流れる者は。早く去れ。敢て平民主義の高潔なる美名を穢す勿れ。再び來らんと欲すること勿れ。辛苦耐勉。自働自活。奮勵進取。確實直行。敬虔に。節操に。平等なるは。平民主義の本領なり。蓋し門に入り座敷に座し。肉を喰ひ始めて其の味の如何を辨するが如く。眞個平民的社會に於ても。其平和にして春風の如く。和氣藹然乾坤に充ち。清きこと天國の如きは。之れを踏み。之れを行ひ成したる者にあらずんば敢て知るべきなく。又筆紙の敢て形容し能はざる所なり。

特 寄 書

元 氣 と 平 和

從 容 生

家國の盛衰。一身の興亡。夫れ何物ぞ。我は稱して元氣の消長といふ。昔に在りては。彼の羅馬。希臘の成敗。近くは吾徳川幕府の榮顔亦以て徴するに足る。在昔。大石良雄が四十有餘の士と吉良義英を殺して。藩主淺野長矩の仇を報するや。彼は始め藩士と謀り。岡藩連判の歎願書を捧呈し。領地の召上を免じ。跡目相續に付幕府の所置を乞へり。而して急激の徒は朝々夕々城を枕にして。死すべきを痛論せり。歎願書の意遂に聞き届に及ばざるに及んで。彼が意既に大に決るものあり。然れども彼は容易く發するものにあらざるなり。命して藩士を登城せしむ。計らざりき。四百の藩士。登城するもの。三百に充たざりしならんとは。甲論乙駁。接々の中に。再び翌日の登城を命せり。尙計らざり



き翌日に至り。會者僅かに百五十に越へざりしならんとは。而して第三日に至ては。嗚呼。閩藩士の四分の一内外に止りしのみ。彼は尙是れに満足せず。權謀を用ひて。藩士の意表に出で。以て曖昧不顯。死士の名を辱しむべき者を洵汰しぬ。復仇盟約の神文を返還せしは。實に大石が諸士の頭上に加へし。鎮案にてありき。雪降る元禄十五年十二月十四日吉良家に亂入し。義英の首を刎ねし時は。滅じて僅々四十七士となりぬ。彼若し主君遭難の報に接し。閩藩忿怒に際し。城を枕にして死すべきを誓は。閩藩の士。少くとも三百は實に彼の配下なりしなるべし。然れども。彼は驕卒情に激して事を起す。畢竟不利に終るを知る。茲に於てか。決死の士を擡拔し。相謀つて竊に吉良を殺んと欲す。苟くも他に漏れば事は瓦然。水泡に歸せんとす。是を以て彼百方力を盡て。確實ならざるの士を去る。誠に以ある也。彼巧みに太平を裝ひ。遊樂擅なるの觀をなし。一は以て吉良家の戒嚴を緩ふし一

は以て藩士を謀る。斯くて復仇の念勃々已むべからざるもの。能く大石の股肱たるもの。實に四十六士ありき。凡そ人情に激するときは。水火を厭はず。調子に乗るときは。何事をも爲ものなり。然れども是れ眞の元氣に非るなり。是を以て成功を見るを難し。蓋し眞の元氣は情に支配せらるゝものに非るなり。四十六なるもの。大石なる大教師に因て。巧に試験せられ。忿々情を冷却せらるゝのみならず。一身の安隱と利澤とを以てし。經志弱行を欺誘す。此積杆に因て轉せらるゝものは。大石棄て、更に顧みず。斯くて信任を與へたるは。實に四十有六士。はれ茲に於て滑へらく以て爲すべく。以て成るべしと。偉なる哉。四十有六の傑士。蓋し彼等其始めに於て。主君の遭難を聽くや。情に於て大に怒びざる所あり。奮然蹴起。以て城を枕にして死せんと欲せしなるべし。然れども大石の爲めに。利害得失を考ふるの時間と。自家の安否を想ふの利便とを與へらる。而して尙は一死



平 等 寄 書

以て主君の仇を報せんとす。眞に是れ元氣の横溢せるものと云ふべし。而して之を統本する大石は其尤なるものなり。情に支配せらるゝの元氣は。眞の元氣に非ず。騒亂の際に起る元氣は。眞の元氣にあらざるなり。蓋し眞の元氣なるものは。理想の根底より發する光焰なり。更に之を切言すれば確信に因りて出て來らざるべからず。

我嘗て史を論じて。米穀渡來の際に於ける士氣に及び疑へり。志士の「寶刀難染洋夷血」と絶叫し。「此心扁欲播戎夷」と稱導し。今にして尊攘を講せざるものは。國家の奸賊。夷狄の醜奴のみ」と怒號し。邦家の爲に妻子を棄て。辛酸數奇の理に奔走して厭はざる所以のもの。彼れ情に於て激する所ありて。而して事の茲に至りしなるか。今竊かに聞らく。外交と滅亡とを同一の意味に解釋せし。當時の國民。彼は外人を見るに夷狄禽獸を以てし。吾國を以て神國なりとす。マニラの來る。彼れ固より情に堪へざる所あり。忿々。以て尊攘の猛願を

平 等 寄 書 (六)

望みしに相逢なかるべきなり。然れども外交の難波浸し來らざる以前。徳川の泰平を夢みし時に當り。早や忠孝の教と神國の觀念と。併せて固陋なる封建的志風に因りて。未だ見ざる外人を以て禽獸とし。之を攘はされば。和魂に愧づべきとなす。況んや之と通商互親。を爲すをや。彼既に夷狄禽獸を以て。外人を視。敵を以て外國に對す。固より情に於て之と通商互親するを欲せりしなるべし。雖も。要は彼の理想の卑下と。志風の固陋とに出づることは亦明なり。是れ彼等志士が霜に凜し。飢を凌ぎ。千難万難の餘。尙剛骨峻々たる所以其識見の遠大にして。理想の高尙なること。開國論者の如きは。誠に尊むべきなり。

要るに赤穂四十七が主君の爲に。献身的の事業をなし。マニラ渡來時代の志士が國家の爲めに。進んで死を恐れざる所以のものは。彼の確信に因りて出で來る元氣に在り。凡そ戰亂時代を見るに。一舉一動。情の動くに従ひ。彼の理想を通過して。研究するの暇ありらるゝなり。縱令其暇ありとするも。之を考



平 等 寄 書

察する。胞中の餘裕は。決してあらざるなり。是を以て情熱一たび冷へて。亦奮はす。恰もハイロンの詩句に在が如く。一炬を森林に投し。颯々天を焦燼するも唯是れ瞬時の光火。利耶にして闇闇に歸るが如し。東坡が大勇者を以て。卒然之に臨んで。而して驚かき。故無ふして之に加へて怒らずといふ。至言といふべし。匹夫辱められ。劔を抜いで起ち。身を挺して戦ふ。是れ固き情に出づ。未だ眞の元氣と爲すに足らき。謂ふに。眞正の元氣なるものは。敵も控へて。而して後起るものにあらず。戦亂時代に起るべきものに非ず。間。是れありとすれば。是れ拔群の士。千百の一に過ぎき。

我は未だ理想なくして眞正の元氣あるを見ず。確信なくして。眞正の元氣あるを見ず。嗚呼。此理想。此確信。之の眞に情に制せられざるもの。我は之れを平和社會。胞懐平靜なるの時に於て見るある而已。

平 等 雜 錄 (七)

雜 錄  
拔 書 短 篇

○ 生

一 西郷南州遺訓に曰

道は天地自然の物にして。人は之を行ふものなれば。天を敬するを目的とす。天は人も我も。同一に愛し給ふ也へ。我を愛する心を以て。人を愛する也。

二 同

已れを愛するは善からぬこと。第一也。修業の出来ぬも。事の成らぬも。過を改むること。出来ぬも。功の伐り。職設の生ずるも。皆な自ら愛するか爲なれば。決して。己を愛せぬもの也。

三 同

何程制度方法を論ずる共。其人に非ざれば。行はれ難し。人有て後。方法の行はる。ものなれば。人は第一の資にして。已れ其人に成るの。心懸け肝要なり。



平 等 雜 錄

一別冊。三條之御高論。一々敬服仕候。方今之國是。此外に有之間敷候。唯可恐者自然之天理。一切消亡致し。人々各私心を以、意見を立。互に敵仇相成し候得者遂に

四 横井小捕手簡 柳藩立花壹岐へ答ふる書

皇國を亡に至り可申候。近來之京報。定而御承知と奉存候。京師關東兩立之勢。其間是非之可議は可有御座候へども。要之。共に私之爭論にて。實に歎息仕候。其他列藩何方も。私論のみにて。公共之天理絶て承り不申。扱々闇夜と相成。いづ明るへき世の中や。不可知。君子此間に在る。彌増誠心を磨き。天理を明にし。爲百世斯道を立つ志。第一義と奉存候。如何にも。拜復早々可仕處。眼病相煩。引續齒痛。老病。種々差起り。心ならず。延引奉恐候。山海之御咄申度候。之共。書狀に盡し得不申。先此段拜呈仕候。頓首拜。

○幕府初度長州藩征伐同藩伏罪後の頃の書なりといふ

平 等 雜 錄 (八)

立花宗茂公

○ ○ ○ 生

熟々國家隆替の形蹟を考ふるに。國家の花々しく榮へて。忽焉として終れんとし。正に亡びるに乘々として。復た起り。其興敗の神奇にして。危機一髪の間にあるは。誠に入の想像の及ぶ所あらず。例せんは。彼のイヌタエの民族か。埃及王の暴虐によりて。遺類なからんとし。火焰の天柱は忽ち妖霧の中に建てられ。セーの誠意によりて。紅海の道を開かれ。正氣は天に翻りて。始めて虎口を脱したるが如き。若しくは嘗て舊世界の最大都城と呼ばれたる。故のローマが。敵將ハンニバルの爲めに蹂躙する所となりて。其存亡且夕に迫まり。突然小キベオの起れる鎮守によりて。敵國と共に。ローマの堅甲を打破し。ローマをして。念々赫々の光を放たしめたる如きは。皆歴史上の眼をなす事實にして。吾人は之れを。奇遇の興敗と言はんよりも。寧ろ國家及び人



平 等 立 花 宗 茂 公 雜 錄

事成就の。運數として認知するの。適當なるを知る。今中原の事は須らへ度外  
に置き。大友が鎌倉幕府創立と共に。九州に下りて。九州探題の威名の下に。全  
島を鎮制するや。豊後大友の名は。大豪雄として。數百年の間に。凛々鬼の如く  
に。神の如くに。人をして無服せしむるの魔力ありき。此の如くにして。彼れは  
榮へ茂り。宗麟によりて花を開き。宗麟に至りて山の絶頂に達しぬ。然して。其  
秋風落漢たるの惨狀を描かんことは。彼れが謙争の道を塞ぎ。群小を親近し  
て。福を極め。剩さへキリッソノ樂を信じて。下手にも神社佛圖を燒き拂ひて  
昨日までは。兒童何人か爲んどて。見下したる島津が。奇貨得たりとなし。御警  
を神樹に立てつ。日州耳川に向いたるの時こそ。日輪の西山に碎ける曉鐘の。  
思となましむ。九州は既に主權者を失いたりき。地は亂麻に化し。豪傑の群り  
起らざらんことを欲するも。亦た得べからざるなり。南天の大雷は電により  
て。島津を示し。西海の颶風は。龍造寺を呼び起し。北山の雹雪は。毛利を捲いて

平 等 立 花 宗 茂 公 雜 錄 (九)

來り。大友の兵は蠅の如くに散り。枯葉の如くに落ちてぬ。凡そ人の主權を握る  
や。其始め力あるの時に當りては。敵も身方となり。仇も吾れと化すと雖も。一  
朝力の弛むに至れば。身も敵となり。親しきも仇と化すること。戦國の法にし  
て。離合集散の常理なれば。大友の地日に削られ。大友の將日に叛き。又如何  
ども爲すべからず。彼の史家か大友の將甚驚れと稱するものは。即ち此の時  
を嘲けりたるの言葉なり。將に天の運數は何處にあるか。天の脈絡は孰れに  
存するか。敢て辨知するに由なかりしなり。而して宗麟は益愚かに。愈暗く。立  
花は大なる版圖を擧げて叛き。秋月は豪族として鋒を東に向けり。吉弘。清田。  
臼杵。の諸小族ありと雖も。此の間又た如何せん。術の施すべきなく。力の扱べ  
きなけん。然れば天の大友を捨てること。彼れの如く速かに。彼れの如く甚だ  
しく。恰も霹靂の耳を蔽に。速まなく。腐繩の薪を束ぬるに力なきが如くなり  
と雖も。未だ其の祀を絶ち。其の廟を滅すことは。欲せざるもの、如くありき。



何となれば。戸次道雪公。高橋紹運公の正氣誠忠は、能く天に達しぬ。彼の高良山に建てたる雄々しき戸次公の旌旗也。若屋山上突兀たる高橋公の城塞也。以て龍造寺を壓し。以て毛利を制するの鎖案たり。立花を拔ぎ秋月を蹴るの鎖蹄たればなり。爰に於て吾人は。霜雪降りて松柏の凋むに後れ。疾風吹き來りて勁草を知る。とは。千古の格言として大に嘆稱せざるを得ず。天地亂れて節義の士顯はれ。潔士は重劔を鳴らして起つ。二公の大友氏に於けるの地位。斯の如く至重にして。而して又九州の天柱なりき。永録の年間。二公の西に取ひ。北に攻め。且に相い援ひ。且に相い應じて。風に櫛り雨に浴し。共に々々肥筑の野に轉戦するや。紹運公は十年十一月十八日を以て。其の夫人。齋藤氏一子を挙げぬ。之れ即ち宗茂公にして。幼名を統虎と稱じぬ。公稟性强捷にして。六七歳の頃より武を好み。遊戯常に他童を搦倒すと傳ふ。長せらるゝに及んで。聰敏穎悟。頗る辨才ありき。歳甫めて八歳なり。出て物を觀る。群不逞にして

(以下次)

山吹序

大樹公御返備王政復古以來。一二の同志と紙冊を往復し。天下の時務を筆談すること。已に數卷に及べり。此書は。往復中の大意を抜書し。或は二三の有志と談話の日記を抜て。其大略を記し。前後を正し。綴て以て冊子となす。或人往復を見て。怪んで問て曰。君悠然世事を離れ。養病を以て事となす。已に七年。嘗て長藩輦轂の下に。于戈を動かしてより以來。再度の長征。我藩兵を出し。上下鼎の涌くが如し。有志首を集めて。日夜に危急を討論し。遇々君に追るも難し。君依然として願す。曠野に遊歩し。河海に逍遙す。病閑筆を取ると雖も。必ず婦女子の爲に一笑珍事を玩記するの外。未だ嘗て時務を記せる物を見ず。嘗て樹公返備。王政復古の時。同志互に愉快を報し。多年の愁眉を開く。今此時に當て。只君のみ常に憂心有が如く。筆を取て時務を討論し。専ら天下の攘亂を悉る。は何ぞや。予答て曰。彼長征の如きは。一時の戦争。只勝敗の決するのみ。何



予皇國の安危に係らんや。樹公返樞。王綱新改の如きは。實に神州の典廢に關  
係す。豈思はざる事を得んや。夫戰爭を恐るゝは。一身の死生を思ふが故也。權  
權を思ひ掛けざるは。兼て天下の存亡を思はざるに由れり。天下を憂て一身  
を顧みざるは有志の常也。何予是と怪むに足らんや。友人唯々として過く。是れ  
予が調體の身を以て。天下の時務を論せざることを能はざる所以なり。而して  
今又其往復を抜がき。談話を記して以て。冊子に綴る所以の者は。己が爲にす  
るにもあらず。又人の爲にするにもあらず。只だ奇病の僻として。狼りに筆紙  
を費す而已。夫言ふ事は易ふして。行ふことは誠に難し。此書たるや。淺學陋識  
の身と以て。狼りに天下の大經を論じ。妾に王侯賢哲の得失を評し。大言妄語  
至らざる處なしと雖。其身は疢痼。生を偷むの外。更に一事も行ふ事能はず。世  
に山吹と云ふ。草は花多しと雖。實は一つも結ばざるが如し。此故に名つけて  
山吹といふ。慶應三丁卯の冬。調體自ら序す。

立花壹岐先生遺稿

山吹篇

〇〇〇生

慶應三丁卯十一月中。往復大意拔書之一。  
來書に曰く。今度大樹公政權を朝廷に御返し。則別紙の通りにて。有志年來の  
宿志。愉快誠に此の時に御座候。

別紙

誣んで皇國時運の沿革を考へ候に。昔し王綱紐を解き。相家權を取り。保平の  
亂。政權武門に移てより。我祖宗家康に至り。更に寵眷を蒙り。二百有余年。子孫  
相受け。臣その職を奉すと雖も。政刑當を失ふこと不少。今日の形勢に至り候  
も。畢竟薄徳の致す所。不堪悲懼候。况や當今外國の交際。日に盛なるにより。愈



よ朝權一途に出で不申候ては。綱紀難立候間。從來の舊習を改め。政權を朝廷に歸し。奉り。廣く天下の公議を盡くし。聖廟を仰き。同心協力。共に皇國を保護仕り候へば。必ず海外萬國と可並立候。慶喜國家に盡くす所。是に不遇と奉存候。乍去猶見込の議も有之候へば。可申聞旨諸候へ相達し置き候。依之此段。謹んで奉聞仕候以上。

別 紙

祖宗以來。御委任。厚御依頼被爲在候得共。方今宇内の形勢を考察し。建白の旨趣。尤に被思召候間。被聞食候。尙天下と共に。同心協力。皇國を維持し。可奉安宸襟御沙汰の事。

○愚荅書に曰。大樹公より差出の一章。其深旨を考ふるに。從來の舊習を改むといふ一句にある様に在られ候。右舊習なる者は。何等の事にて候哉。御賢意承り度候。

昔し王綱紐を解き。藤原氏政を専らにし。保元平治の亂。政權武門に移り。王臣王土の名義。世を擧て知る者なきは。弊習の由て來る所なり。今般樹公御真心御感發。政權御返し。朝廷政權一途に出で。廣く天下の公論を盡し。聖廟を仰き奉り。同心協力。天下と共に。皇國を保護し。率土一民。王臣王土に非ざることなき。天下の名義。四海に昭なるは。弊習一洗の所なり。今日の形勢。必ず可成の期癸丑以來。有志の慈眉誠に可開の秋なり。

誣題一絶

天道往來日夜新。人心又有重活神。欲知天下從來弊。例格例文總壞陳。

○保平以來。凡千年の舊弊例格例文。茲に極る今日武門の政權皇朝に歸するは。天道循環の時勢。穴勝人力の然らしむる處にも無之と申す者にて。公議を盡し。聖廟を仰き。同心協力。政權一途に出づる等の文句は。和漢古今。治國の定法。凡そ改革の手始め仰出しの例文なり。只御書中に於て。其御實行と



相成候分は。從來の舊習を改め賜ふの一件にあり。此故に。一章の大旨は。御  
改弊の一句にありと云へり。然る所。御來文に。必き海外萬國と可並立。我國  
籍に所盡。不過之。と有之候。乍恐ら爰に一の疑ひ御座候。如何となれば。假令  
我皇國從來の舊習をば盡く改たりども。元來我神州の國体を以て。方今海  
外の萬國と。並立んと思召賜ふは。誠にあずくゝなる申しごとにて。一毛を  
以て九牛に比するが如し。譬へば。舊習を改るは。衣服の垢を洗ひ。刀のさび  
を落すが如し。垢のみ洗ひさびのみ落すと雖も。地下が綿服鈍刀なれば。綿  
帛利刀の中に。並立べき謂なし。仰せの如く。今日の形勢。可爲の秋には候得  
共。事に幹たる御方。今日の御規律。御心術にては。壤亂近きにありと恐懼の  
至りに候。

大人は天下の壤亂近きにありと。樹公の心術改弊の小経論に止るを悲めり。  
鄙生は不然。王政復古の大機會。可成の秋と思へり。此意趣異なるに似たり。後

の二條。又只愚意を書す。請諒察し賜へ。

天理人心字内同志。然れ共國の風俗禮儀。或は綿衣の如く。或は絹服の如く。或  
は利刀あり或は鈍刀あり。如是差別あるは。天理の得失。人心の邪正。明暗。に由  
るのみ。我神州古より人民性質の美。土地産物の富饒なる。萬邦に劣るに非ず。  
誠に天理を奉じて。王綱を一新し。教導を明にして。人心を正し。政令法度は。方  
今字内の形勢を参考し。舊陳を除き。新盛を務めて。海外萬國と。並立て字内に  
冠大たること疑なし。何ぞ九牛の一毛を以て。自ら處ることをせんや。

天下の政務に幹たる人。其心術の純駁。改革規模の大小に由て。治亂存亡成敗  
あるは。和漢古今の同じき所なり。大人の懼る。眞に然り。愚が如きは。樹公心術  
至純なりや。雖駁なりや。規模遠大なるや。狭小なりや。究め知るに及ばず。獨政  
權を朝廷に御返し。大下と共に皇國を保護し。海外萬國と並立。長く天下の民  
を安し。國家に報はんどの御真心は。時運に感激して。躬ら知す。信實より發揮



せられたるは疑なし。右御真心を培養し。佐けて共に。其美を成し。天下を治め。宸襟を安じ奉るは。有志の志願急務なり。  
○樹公の御建書に。當今外國の交際。日に盛なるに由り。愈政權一途に出でざれば。綱紀難立云々。有之候へば。信實より發出したる自然の御真心にては無之。眼前之時運に感動し。一旦懼然として。政權を天朝に返し。賜ふ御事なるべし。然れば。前書に所謂。保平以來。武權の衰極。天教一周環して。樹公卓然天道に基き。明徳上の御心實より。活發せられたるには。あらず。仍之其心に生ずる所。其事に待あるの習ひ。布告の發達。從來の舊習。改弊の小規模に止り。日本の國體。彪變の御事。業に至らず。況んや卓然天心を奉じて。天爵を務め。其化育を助けて。大地と三ツなるの。御規模上に確立し。賜ふ時は。外國の交際盛なると盛ならざるとに。拘り賜ふに及ばずして。其御事業自然と諸藩に普及し。我日本一小國の体幹を以て。海外萬國と双立するは。勿論守

(以下次号)

記 事

明治二十六年

梅蕾は笑を含み。將に馨を南風に放たんとし。麥芽は空に接して。愈縁なり。慶雲九天に充ち。四季の門戸始めて開く。不知。新日本の青年。如何なる覺悟ありて。此のスプリングタイムの關門に入らんとするか。

年と共に新に

世は年々共に新になりぬ。陰險を拂て。公明に入り。卓劣を捨て。正大に移る。公明なれよ。正大なれよ。世は年と共に新たになりぬ。

教育者!

天地果して大道ありとすれば。空しく斯の道を以て。正々堂々。天下英才の青年に臨め。一点一劃も私意私情。非道偏理あるべからず。然らざれば。可憫も彼



等は。他日窮巷に悲嘆すべし。

天眞なる美少年！

尾を振りて来る犬は愛すべし。萬物の靈たる人間に於ては。サマデ悦ぶべきにあらざ。微笑と愛嬌とは。奇妙にも諸子をして雀躍せしむ。忽ち天外、聲あり。開け——巧言冷色は仁すくなし。

近來の好名産

愚者蠅の如く。講者蝸の如し。時には時事。時には國運。口頭泡沫正に一舛。論益奇にして講愈妙なり。快々然拍手の音。徹晝徹夜。難問す。論は快を主とする手。講は妙を貴とする手。否！——當今の議論多くば空。實行も亦無。嗚呼空と無とは。近來の好名産？

來れ

燒石磊々赤土漠々たる。死せる噴火山の如き青年よ。汝來て神聖なる。雄麗な

平 等 記 事

平 等 記 事

る。豪膽なる。猛烈なる。一團の炎々たる。活火を胞中に点せしめよ。起業的精神ど。確執的の耐力は。勃如として湧き来るべし。

彼の土曜會

嘗て革命の噴火口と稱れし。彼の土曜會は。新玉の年を迎へてより。始めて鍛冶屋町光樹寺にて。十日午後七時開かれたり。爽氣滿堂。南風は南なる人の聲を齎して。北なる人の心を暖め。快話は北に發して南に應ず。藤村本木の両氏南に論して。堀内清氏北に萬斗の襟を開く。如何に眞平和——百萬々歳。

舊橋齋學館同窓會

は去し年終の月。二十九日を以て爲さる。會する者四十餘名。角力。レスポール。演説は一年前の夢か。或は變體的？貴族的？平民的？夏期大會も？。

精神の風邪氣

年の爲め老るは詮なし。例令福岡新聞の忠言あるも併し。精神の風邪氣は。他日の肺病ぞ。



小學

千島艦沈没の士を吊す

四年 浅山

誣んで千島艦沈没の將士を吊す。古今歴代を考ふるに。或は義旗を孤山に建  
 て。天下の大勢を回倒し。海内を掃除し。勢の再び翻るが爲に。終に命を河畔の  
 松林に致し。或は短刀を揮て夷狄の艦艦に攀ぢ。身を蒼海の波濤に投し。或は  
 世を慨して單身海外に赴き。苦學十數年。疲瘦の体を以て東西に奔走し。書籍  
 を枕にして學生の前に跪れたるあり。如斯烈將義士。皆芳名凛として香し。熱  
 々拔毛るに。公等精屬誠忠。天朝の拔擢を蒙り。遠く萬里の海洋を渡り。印度々  
 ノゴールの洪濤を横切り。鯨浪を蹴り。英氣勃々。壯圖を抱て正に倒扇山を夢  
 んとし。忽焉空しく海低に没しぬ。卑生。已之助。双涙感慨すること久し。然れ共  
 公等誠忠也。正に古。殉國の士と。天上に翱翔すべし。何は吾が拙文を賛け！。

平等記事

平等略則

平等ハ會員及賛成員ヲ置ク  
 會員及賛成員ハ毎月金三錢ヲ  
 支出スヘシ

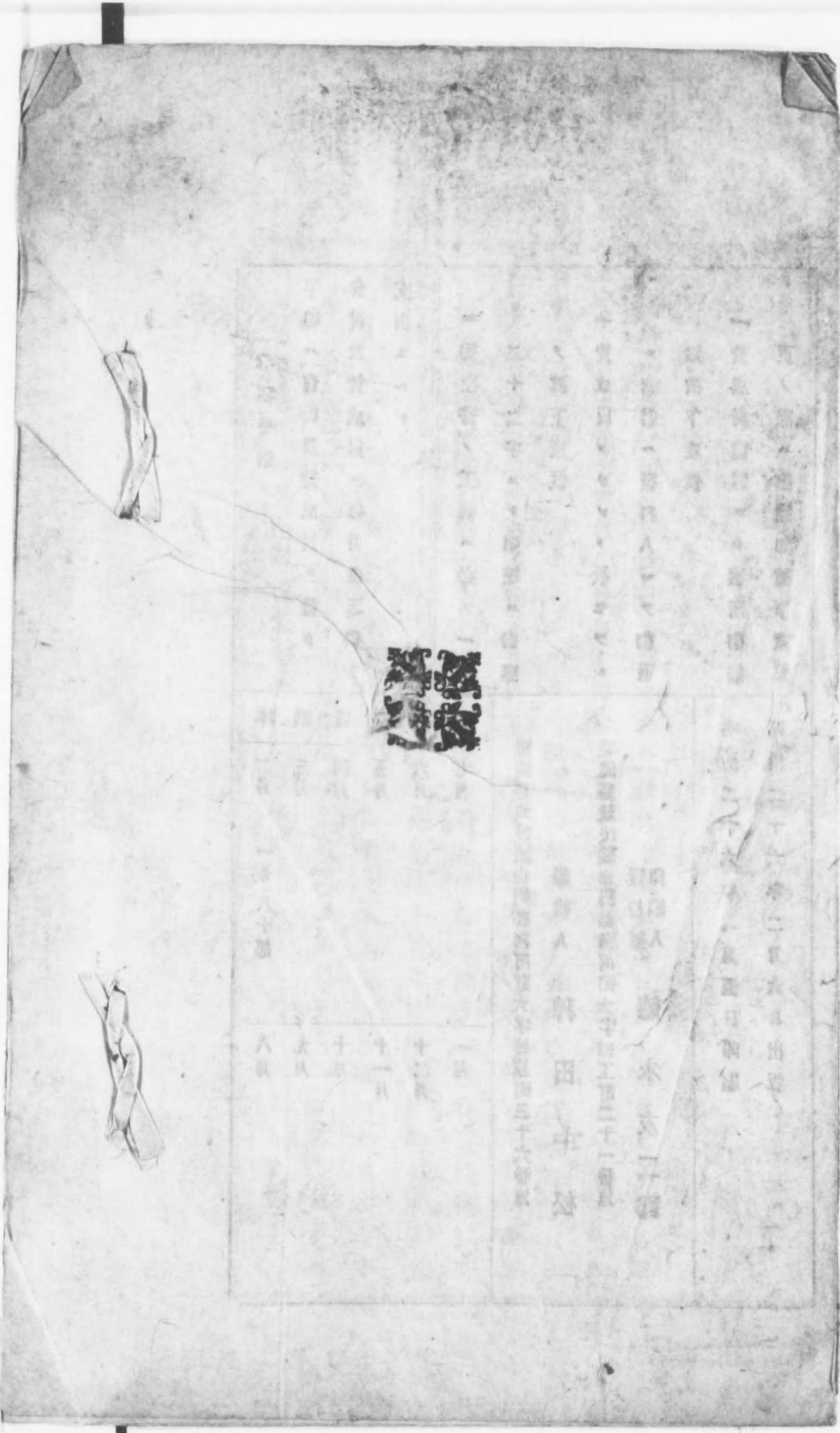
- 一 御投寄ノ玉稿ハ必ス一行  
三十二字ニテ明瞭ニ御認  
メ被下度候
- 一 賛成員ヲラント欲セラレ  
ル諸君ハ發行人マテ御通  
知被下度候
- 一 賛成員諸君ニ宿所御變  
更ノ際ハ御通知被下度候

本	二月	一月
紙	三月	八月
發	四月	九月
行	五月	十月
部	六月	十一月
數	七月	十二月
		一月

福岡縣筑後國山門郡柳河町大字椿原町三十六番地  
 編輯人 稗田市松  
 發行兼印刷人 徳永友二郎

明治二十六年二月二十一日印刷  
 明治二十六年二月二十一日出版





終